『みねさんの　あぁ、そうなんだ塾』　【第５４回】

カトリック教会のミサは、「父と子と聖霊の御名(みな)によって」という司祭(神父)のことばに合わせて、胸の前で十字架のしるしをして始まります。「父」とは神さま、「子」とは「神の子」であるイエス・キリスト、そして「聖霊」の三つの名を唱えて、集まった人たちが神のことばを正しく聞き、感謝の祭儀をふさわしく行うために心を整えます。

今回はその中の「聖霊」について考えていきます。またこれがムズカシイのです …。桐生教会には、わたしの中学校教諭時代の教え子が何人かいます(もう 40 代になるのかなぁ)。以前、その一人である女性が、「先生、わたし、聖霊って、何だかまだよくわからないんです…」と言っていました。ご両親がカトリック信者の家庭に生まれ、おそらく幼児洗礼を受けたのだと思います。現在彼女は教会内の大切な役目を任せられている、明るくまじめな女性です。彼女だけではなく、多くの信者さんたちにとっても、「聖霊ってなぁに？」とあらためて聞かれると、「う～ん …」と考え込んでしまうかもしれません。わたしもその一人といわざるを得ません。「それなのに、こんな入門講座書いてていいの!?」という声が聞こえてきます。はいはい、スミマセン。それでは精いっぱい、がんばらせていただきます。

✞　「聖霊」とは何か

『五旬節』の出来事

イエスの生涯を受け取りなおした初代教会の人々は、その教えを広めるために積極的に対外活動を開始します。そのきっかけとなった奇跡的な出来事が、『使徒言行録』第２章１～４節に書いてあります。

……

1 五旬節の日が来て、一同が一つになって集まっていると、2 突然、激しい風が吹いて来るような
音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。3 そして、火のような舌が分かれ分かれに現
れ、一人一人の上にとどまった。 4 すると、一同は聖霊に満たされ、”霊“が語らせるままに、
ほかの国々の言葉で話しだした。 5 さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信
心深いユダヤ人が住んでいたが、 6 この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、
自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。7 人々は驚き怪しんで
言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。 8 どうしてわたしたちは、
めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。」

……

〈五旬節〉とはギリシャ語の「ペンテコステ」の訳で、「50 日目」という意味があります。モーセに率いられたイスラエルの人々が、エジプトを出て 50 日目にシナイ山で神から『律法』を授かったこと(『出エジプト記』第 20 章参照)を記念するお祭りです。この期間、ユダヤ本土に住むユダヤ人たちだけではなくメソポタミアからギリシャ・ローマ世界に散らばって住んでいた数多くのユダヤ人たちも、エルサレム神殿に巡礼にやって来ました。

そのとき、弟子たちが集まっていた家に大音響が起こり、たくさんの火のような〈舌〉が現れたというのです。「火のような舌」なんて、ちょっと薄気味悪いですね。聖書において「舌」は「信仰を告白する」場合に使われることがあります(『フィリピの信徒への手紙』２章 11 節参照)。

その後、彼らは『聖霊に満たされ』、『ほかの国々の言葉で話しだした』というのです。それを聞くユダヤ以外の地、たとえばメソポタミアやエジプト、アラビアからやって来た人たちは、自分たちの生まれ故郷の言葉で初代教会の人々が神さまの業(わざ)を語っているのでとても驚いたわけです。それぞれの地域の言語など、ガリラヤに住む人々が話せるはずはありません。しかし初代教会の人々は、『聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに』話しだしたのです。

「聖霊」とは、〈風〉そして〈息〉…

さて、『聖霊に満たされ …』の〈聖霊〉とは何でしょう。

「霊」のつく言葉を思いつくままに書いてみますと …「幽霊」「背後霊」「亡霊」「守護霊」「霊魂」「霊感」…。なんだか気が滅入ってくるようです。体に宿り、あるいは体を離れて存在すると考えられ、目に見えず、人間の知恵でははかりしれない不思議なはたらきをするものと言えるでしょう。日常生活ではめったに口にしない言葉が多いですね。わたしの3歳になる孫(女の子)は、『めがねうさぎ』という絵本がお気に入りで、そこに出てくる「おばけ」の絵を描くのがすきです。でも「おばけ」はこわいようで、暗い場所がきらいです。「おじいちゃん、おばけがでるよ…」なんて言うことがあるので、「じいちゃんはもう65年も生きてるけど、一度だっておばけなんか見たことないよ」と安心させます。

「霊」という語感もよくありませんね。あまりお近づきにはなりたくない存在の一つではありませんか。「聖霊」について『岩波　キリスト教辞典』には、こう書いてあります。

……

『「新約」では、「神の霊」「復活したキリストの霊」をしばしば聖霊と呼ぶ。「霊」はヘブライ語で「ルーアッハ」、ギリシャ語で「プネウマ」。ともに生命を与える息吹、風を意味し、それが神から人間に与えられるとの理解が根底にある。父としての神、子としてのキリスト、そして聖霊が三位一体(さんみいったい)としての神を表す、と伝統的に主張される …(以下略。傍線、筆者)』

……

日本語の聖書で「聖霊」と訳されている原語は、ヘブライ語で「ルーアッハ」、ギリシャ語では「プネウマ」。さて、これにどんな意味があるのでしょう。(「三位一体」については、次回で書きます。)

ここでまたまた、そしていつものように、山浦玄嗣(はるつぐ)先生のご登場です。先生は「プネウマ」についてわかりやすく説明しておられますので要約します。

ギリシャ語の「プネウマ」には、〈風・息・呼吸・生命力・心・霊・魂〉などの意味があります。ひとつの単語が、これだけたくさんのちがう意味を合わせもっているのです。私たちが日常使っている日本語では、それぞれがまったく別の概念です。2000年以上前のユダヤの人たちは、この多くの概念をすべて「プネウマ」として、「ただひとつのこと」と理解していました。

「風はどうして吹くのだろう」と考えた彼らは、「風というのは神さまの息だ」と受けとりました。山浦先生のおもしろい文章があります。

『神さまが御機嫌のよいときにはソヨソヨとやさしい風が吹き、神さまがお怒りになると猛烈な台風になるのです。だから風と息とは同じものでした。』

第17回で『創世記』第2章を引用して、神が人間を創造されたという話を書きました。もう一度、7節をお読みください。(傍線、筆者)

……

『主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。

……

『土（アダマ）の塵』をこねて人のかたちをつくり、『その鼻に命の息を吹き入れられ』たので、土塊（つちくれ）人形は息をし始め、生きるもの（人）となった ― という話です。だから「風」や「息」は「いのち」を与えるものなのです。

森一弘師が「息」と「風」それぞれを基本とした「プネウマ」の意味がどう発展していったのかを書かれていますので、ご紹介しようと思います。（森師はヘブライ語の「ルーアッハ」を用いておられます。）

「息」― 私たちを、神を愛する方向へと導く息吹

「ルーアッハ」は「ルール―」という空気の振動を表す音に由来する言葉で、空気の振動に結びつくものは「風」と「息」です。生きている人間は息をしています。ここから「ルーアッハ」は《命を与える力・息吹》という意味をもつようになりました。

そして紀元前9世紀ごろになると、預言者たちの言葉や『詩編』では、「欲望の霊」や「嫉妬の霊」など、人間全体を一つの行動に動かし、導いてしまうような強い心情や感情を表す場合に使われるようになりました。さらにこのような流れの中で少しずつ、人間をその根底から支え、導き、神に向かって駆り立てる働きをするものを「愛の霊」と表現するようになっていきます。森師は『「神の霊」は、わたしたちの心、思い、気持ちのすべてを、神を大事にする方向に導いてくれる息吹と理解してよい』と書いておられます。

「風」― 神に選ばれた者の使命を支え導く力

次に、中近東のような荒野に接した世界では、「風」は自然の姿をすっかり変えてしまうほどの強く恐ろしい力をもっています。そこから「ルーアッハ」は、《歴史に働きかけ、歴史を動かしていこうとする神の力》を指すようになりました。『旧約』の中では、神の霊が注がれた預言者たちが神の望みに従って人々に語りかけていくような場合に使われました。森師は『神によって選ばれた者の使命を支え導く力と理解してもよい』とされます。

時代が進むにつれて、「息」や「風」に信仰にかかわる意味が加えられていったのです。

あなたにも、〈風〉はやさしく吹いています！

「五旬節の出来事」はイエスが復活した後に起こったわけですが、すでに〈最後の晩餐〉のとき、イエスは自分がいなくなっても「代わりの者」をこの世に送ることを約束していました。

……

15 あなた方はわたしを愛しているなら、わたしの掟を守るはずである。16 わたしも父にお願いしよう。そうすれば、別の弁護者を遣わして、いつまでもあなた方とともにいるようにしてくださる。17 その方は真理の霊であるが、その方を、世は、見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。あなた方はその方を知っている。その方があなた方のもとに留まり、あなた方のうちにおられるからである。18 わたしは、あなた方をみなしごにしておかない。あなた方の所に戻ってくる。19 しばらくすると、世はわたしを見なくなるが、あなた方は私を見る。わたしが生きているので、あなた方も生きるからである。20 わたしがわたしの父のうちにおり、あなた方がわたしのうちにおり、そして、わたしがあなた方のうちにいることを、その日、あなた方は悟るであろう。

……『ヨハネ』14章（フランシスコ会訳）……

「わたし」と「あなた方」の連続で読みづらく、「別の弁護者」とか「真理の霊」などの言葉も

出てきて、わかりづらいですね。そんなときには、「山浦訳」です！　どうぞ。

……

15 お前たちが俺を大事に思うなら、俺の言いつけをよく守る。16 父さまに俺が頼もう。そうすれば、俺とは別の助っ人さまをおよこしなさる。いつまでもお前たちといるためだ。17 まことを語る神さまの息が、風のようにお前たちを包む。〔助っ人さまとはその息だ。〕この世の者らは見ないし、悟らぬ。だから、その身にお迎えできない。だけども、現にそなたらはそのお方をよく知っている。そのお方はそなたらの間に今いなさるし、そなたらといっしょにこれからもいなさる。18 この俺は、お前たちを孤児にして、棄てたままにはして置かない。お前たちのそばに戻って来るぞ。19 いま少しすると、俺はこの世から姿を消す。だけれども、そなたらにはハッキリ見える。俺は活き活き生きているし、そなたらも活き活きと生きるからだ。20 俺は父さまの中にいて、そなたらは俺の中に、俺はそなたらの中にいる。その日が来れば、このことはそなたらにもよくわかる。

……（『ガリラヤのイェシュー』）……

「助っ人さま」とはギリシャ語の「パラクレートス」の訳で、『ヨハネ』にだけ出てくる言葉です。「助ける者」という意味で〈聖霊〉の別名でもあります。山浦先生は『神さまの思いが息吹となって吹いてくる風』のことであると書いておられます。その風（神さまの思い）が、『そなたらの間に今いなさるし、そなたらといっしょにこれからもいなさる』、すなわち自分（イエス）はこの世からはいなくなるが、その代わりに助っ人さま（聖霊）を送って、「神さまの思い」が一人ひとりの中で実を結ぶように、俺はお前たちといつも一緒にいるよ（イエスと「助っ人さま」は一体です。「三位一体」の話までお待ちください）― というのです。

「まとめ」に、〈聖霊〉を見事に表現した山浦先生の文章を引用します。

『神さまの熱き思いを運ぶやさしくかぐわしい息吹！　それを胸いっぱい吸いこむと、生きていることのうれしさが総身に満ちあふれ、活き活きと元気いっぱいになる神さまの息。あるときはソヨソヨと、あるときはゴーゴーと、わたしたちの胸の中に吹き寄せる風。神さまの思いを乗せて吹き寄せる風。あらがいがたい憧れと、美しい夢と、高い理想を運んでくる神さまの息吹。… これが神さまの胸から吹き寄せてくるプネウマなのです』。

園庭から聞こえてくる幼児たちの元気な声。Tシャツに汗をにじませながら働くゴミ収集車のおじさんたち。いつも明るく元気な声であいさつをしてくれるヤクルトおばさん。真夏日なのに制服をキッチリ来て配達している郵便局のおにいさん …。ほら、よ～く見ると、あなたのまわりにも「神さまの息吹」に活かされている人たちがたくさんいます。

そして、あなたにもその〈風〉は、やさしく吹いています。

【引用・参考にした書籍】　・山我哲雄 『キリスト教入門』
・新共同訳『聖書』　・森 一弘 『キリスト教入門 Q＆A』　・『岩波　キリスト教辞典』
・山浦玄嗣 『イチジクの木の下で（上・下巻）』、『ガリラヤのイェシュー』
・フランシスコ会聖書研究所 訳注『聖書　原文校訂による口語訳』